

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

近代「言語学」成立事情：言語学者 藤岡勝二の役割を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2017-04-01 キーワード (Ja): 近代言語学, 藤岡勝二, 言語學雑誌, 新縣居雜記 キーワード (En): 作成者: 柿木, 重宜 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00007720

近代「言語学」成立事情

— 言語学者藤岡勝二の役割を中心として —

柿 木 重 宜

要 旨

言語学者藤岡勝二は、国語学の泰斗上田萬年から、1905（明治38）年に正式に東京帝国大学文科大学言語学科を託される。爾来、藤岡は、東京帝国大学の言語学科、否、日本の言語学界を、30年近くにわたり、唯一人で牽引して、教育と研究に尽力する。しかしながら、現代の言語学では、藤岡の名は、日本語系統論を唱えた人物として評価されているに過ぎない。このような状況に鑑み、拙著（2013）では、藤岡が実に多彩な研究テーマを有しており、近代「国語」の成立において、きわめて貴重な役割を果たしたことを論証した。この研究の途上において、彼が、近代の「言語学」の成立においても、深く関わっている事実が判明した。本稿では、藤岡を軸にして、当時の貴重な資料『言語学雑誌』、『新縣居雑記』等を主に利用しながら、「博言学」から「言語学」へと学問の波が転換するとき、どのように「言語学」という学問分野が築き上げられてきたのか考察した。

キーワード：近代言語学、藤岡勝二、言語学雑誌、新縣居雑記

1. はじめに

本稿では、「言語学」という新しき学問分野が誕生しようとする黎明期に、どのような研究者がこの学問分野の創設に関わり、尽力したのか、当時の文献資料を詳細に検討しながら、近代言語学史の観点から考察した。その方法論として、言語学者藤岡勝二の言語思想に着目して、これまで明らかにされなかった近代の「言語学」の成立事情について、様々な観点からアプローチを試みた。

藤岡勝二（1872-1935）は、この頃の「言語学」の創設に深く関わった言語学者であり、東京帝国大学文科大学言語学科教授として、30年近くにわたり、当時の日本の言語学界をリードし、多彩な研究テーマを有した稀有な研究者である。しかしながら、現代の言語学界において、日本語系統論の研究以外に、その名が挙げられることはまずない。拙著『近代「国語」の成立における藤岡勝二の果たした役割について』（ナカニシヤ出版、2013）において、藤岡が、近代の「国語」の成立において、いかに重要な役割を果たしたかという点について、当時の貴重な文

献を駆使しながら、綿密な考察を試みた。ただし、現段階では、大部の著作集が残されている後進の新村出（1876-1967）や金田一京助（1882-1971）と比肩すると、未だその功績が正当に評価されているとは言い難いといえる。本稿では、彼が、近代の「国語学」だけではなく、「言語学」の成立においても、重要な役割を果たしたことを、残された文献や記録を通して、論証していきたいと考えている。近代「言語学」成立事情という些か壮大なテーマの名称の題目であるが、「博言学」から脱し、「言語学」という萌芽期の学問が、どのような言語思想を基にして形づけられたのか、その経緯を、藤岡勝二という一人の言語学者を軸にして、解明していくことを目的にしたい。お雇い外国人教師バジル・ホール・チェンバレン（1850-1935）が確立した「博言学」という学問の軛から解き放たれ、日本における「言語学」という確固たる学問が誕生した背景には、現代言語学界では、忘れられた存在といえる藤岡勝二という孤高の言語学者の言語理論と実践研究の功績のおかげがあったことを決して忘れてはならないであろう。第2章で詳細に取り上げるが、藤岡の研究テーマの射程範囲はきわめて広く、今後も彼の言語思想の淵源やその思想の変遷を綿密に辿る必要がある。例えば、上田萬年（1867-1937）が弟子と創設した言語学会の機関誌『言語學雑誌』において、編集人という責任ある立場で、きわめて重要な役割を果たしている。

さらに、特筆しなければならない重要な事項は、近代の「言語学」と近代の「国語学」の創設は不可分な関係にあり、創設に関わった人物には、この両者の学問分野に精通した研究者が数多く含まれていたことである。その最も象徴的な言語学者が、後の東京帝国大学文科大学言語学科教授藤岡勝二なのである。

現代言語学の観点からみれば、このような研究は、「言語学史」という言語学の中でも周辺的な学問領域のように思われがちであるが、近代の言語学史を把握しておくことは、現代言語学の研究課題を語る上でも、頗る重要な事項といえるのである。現在まで、連綿として続く言語学の底流には、この頃に構築された言語理論が影響しているのである。

なお、本稿で主に利用した文献は、『言語學雑誌』、そして、現代では、ロシア語学の泰斗とみなされているが、当時は、国語学、言語学の成立に尽力していた八杉貞利（1876-1966）の日記『新縣居雜記』を参考にしたことを付記しておきたい。また、できる限り当時の文献の表記そのままの旧仮名遣いを使用したことも断っておきたい。

近代における「言語学」と「国語学」の接点を考察しながら、藤岡勝二という言語学者を視座におき、様々な文献を検討することによって、近代「言語学」の成立事情を明らかにすることが、本稿の第一の目的である。題目が、近代「言語学」の成立事情という大きなテーマであり、紙幅の関係上、本稿で十分に解明できなかった問題点もみられた。この点については、別の機会に稿を改めて、論じることにはしたい。

2. 藤岡勝二の言語思想と『言語学雑誌』について

2.1 藤岡勝二の研究テーマとその業績

本節では、藤岡勝二の研究テーマとその業績について挙げることにする。以下のように、拙著(2013)において、筆者は、藤岡の業績を①～⑦に分類してみた。ここでは、本稿に関わる藤岡勝二の言語理論だけを重点的に考察していくことにしたい。ただし、⑦の日本語教育に関しては、確かに、この頃、日本語教育に深く携わっていたことが、『言語学雑誌』の「雑報」欄において判明しているが、利用したテキスト、教育期間、施設等、未だ詳らかでない点も多くみられる。したがって、藤岡の他の主たる研究テーマと同一と考えてよいのか、この点については、今後、さらに検討すべき課題としたい。一方、藤岡の盟友といえる同じ東京帝国大学文科大学教授で梵語学を担当した高楠順次郎(1866-1945)も、この頃、日本語教育だけではなく、自ら日本語学校を運営していた。また、よく知られた教育者には、後に、藤岡とともに、ローマ字化運動の実践を推し進めていく嘉納治五郎(1860-1938)がいる。彼は、「弘文学院」という日本語学校を設立して、多くの清国留学生に日本語を積極的に教えていた。現在のよう、「日本語教育学」という分野が確立されていない時代であり、多くの言語関係者が、日本語の教授法を模索しながら、何らかの形で携わっていたという事実には注目しておきたい。この中には、後の京都帝国大学教授新村出も含まれている。なお、こうした事実は、全て、⑦の研究テーマの箇所で記した『言語学雑誌』の「雑報」欄で窺うことができる。ちなみに、藤岡、新村、両者ともに、ローマ字化運動に関与しながら、同時に熱心な 에스ぺランティストであったという点も特筆しておきたい。日本語教育の教授経験とローマ字化運動、エスペラントとの関連性については、今後の言語思想史の観点から重要な課題になるといえる。

下記に、藤岡の研究テーマの項目①～⑦を挙げることにするが、その後に、テーマに沿った代表的な著作も記しておく¹⁾。

① 日本語系統論(日本語とウラル・アルタイ語族との共通性)²⁾

「日本語の位置」『國学院雑誌』第14卷第8号-11号(1908)

② 一般言語学の研究

『言語学概論 — 言語研究と歴史 —』(刀江書院、1938)

ジョゼフ・ヴァンドリエス(1875-1960)の翻訳

③ アルタイ諸語の文献学的研究

『満文老檔』(岩波書店、1939)(満州語の翻訳)

『羅馬字轉寫日本語對譯喀喇沁本蒙古源流』(文求堂書店、1940)

④ 国語国字問題(ローマ字化運動の理論と実践)

『羅馬字手引』（新公論社、1906）

『ローマ字びき實用國語字典』（三省堂、1919）

⑤ 辞書学

『大英和辞典』（大倉書店、1918）

⑥ 宗教学（サンスクリット学）

『弘法大師』（傳燈會、1898）

『方便語録』（天來書房、1937）

⑦ 日本語教育

『言語学雑誌』第1巻第2号の「雑報」

藤岡の初期の研究テーマには、後の辞書学に繋がる欧米の辞書を扱った論文がみられる。『帝國文学』第2巻に寄稿した「辞書編纂法并日本辞書の沿革」であり、後に、この辞書編纂の知識を生かして、『大英和辞典』、『ローマ字引き實用國語字典』を刊行している。一方、言語の習得については、20代の頃には、すでに、サンスクリット、ギリシア語、ラテン語だけではなく、アルタイ諸語、すなわち、モンゴル語、チュルク諸語、満州・ツングース諸語等の東洋の言語にも精通していたことは注視しなければならない事項といえよう。上田萬年は、最新の比較言語学を学ぶと同時に、日本語の系統を解明するために、色々な言語を自らの弟子に習得させようとした。藤岡が、アルタイ諸語に魅力を感じたのは、上田の影響とともに、同時代の言語学者であり、中国語に精通していたゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツ（1840-1893）の言語理論に共鳴していたことと関係があると考えられる。ガーベレンツの父は、満州語学が専門の学者であり、この辺りから、徐々に藤岡は、アルタイ諸語に関心を抱いたと推測できる。また、藤岡勝二という名が最も知られている「日本語の位置」は、元々は、講演した内容を文章化して発表した論文であるが、日本語と当時の名称であったウラル・アルタイ語族の共通項を14項目に分類して提示している。この論文で注目しなければならないことは、藤岡が従来の比較言語学的観点から日本語系統論を解明する手法から脱し、類型論的観点から日本語系統論の解明にアプローチしようと試みた点である。さらに、もう一点は、一般の言語学者の間では、藤岡勝二の「日本語とウラル・アルタイ語族説」と引用されることがあるが、彼は、あくまで可能性を示唆したに過ぎず、軽々に、この共通項だけで、日本語の系統を結論づけてはいないことである。このような藤岡の学問に対する慎重な姿勢は、上記の藤岡の多くの代表的な訳書が、彼が逝去した後、弟子によって編纂、刊行された事実からも窺うことができる。自らが納得のいく翻訳でなければ決して公にしない学問に対する厳しい姿勢が、著書や論文を書かない学者と称され、藤岡の生前の評価を低くしたといえるかもしれない。

さらに、日本語系統論の点でいえば、近代の「言語学」の樹立において、実践的な役割を果

した八杉は、『言語学雑誌』に「アイヌ語断片」という論文を寄稿しており、この頃、上田は、アイヌ語研究者として、彼を期待していたことを窺うことができる。上田自身は、自ら日本語系統論の論文を書くことはなかったが、弟子に諸言語を学ばせながら、比較言語学的観点から日本語の起源の解明ができることを期待したのである。しかしながら、現代に至るまで碩学とよばれるあらゆる言語学者が、日本語の系統論の解明に、様々な方法論をもってして臨んだが、いずれも全ての言語学者を納得させる説にまで至ってはいないのが現状である。

なお、既述した藤岡の研究に対する慎重で真摯な姿勢であるが、一般言語学、東洋学者の間で知られている著書も、藤岡が、1935（昭和10）年に逝去した後、弟子によって編まれたものである。一般読者を対象にして、弟子の横山辰次が編集した『言語学概論 — 言語研究と歴史 —』であるが、ヨハン・ヴァンドリエスの実際の翻訳以外に、藤岡が色々な諸例を掲げているが、それを翻訳の中にも導入して刊行されている。東洋学者の間でも、高く評価されており、藤岡の後の言語学科を継承した小倉進平（1882-1944）が刊行した『満文老檔』の場合は、藤岡自身は、満足した段階の翻訳でなかったかもしれないが、現代アルタイ学の観点からみても、実に緻密で正確な翻訳である。さらに、浄土真宗の教西寺で生まれた藤岡は、宗教学、とりわけサンスクリット学に関する論文も優れており、この分野の第一線の学者と研究を進めていた。その集大成の論文を纏めた『方便語録』も同様に、彼が亡くなった後に、一冊の本として刊行されたものであり、藤岡を宗教学者と間違える研究者もいたほどの出来栄であった。

さらに、特筆したい事項は、藤岡勝二を中心とするアルタイ学者が、国語並びに国語国字問題にも、大いなる関心を抱いていたことである。モンゴル三大文学の中でも最も資料的価値のある『元朝秘史』の訳注『成吉思汗實録』を著わした東洋史学者那珂通夫（1851-1908）も『国語学』という本を上梓していたことも注視すべきであろう。以前、拙著（2013）において、モンゴル文語、満州文語は、文字と音が隔絶しており、文語を習得するには多大なる労力を要するが、本文を転写（transcription）すると、容易に読めることについてふれたことがある³⁾。アルタイ学者が国語国字問題（ローマ字化運動）に傾倒していった背景には、このようなアルタイ諸語の文献のローマ字転写の利便性と関係性を有すると考えられるのである。

では、ここで、上記のような研究を進めながら、藤岡が、「国語」そして、「国語学」という学問の樹立に、どのように尽力したのか、彼の年譜から考察したい。1872（明治5）年に、京都市に生まれた藤岡は、1894（明治27）年に第三高等学校本科一部の内文科を卒業後、東京帝国大学文科大学博言学科に入学する。ここで、師上田萬年の訾咳に接することになるのである。この頃、すでに上田にその言語学的才能を認められ、1901（明治34）年にドイツ留学を果す以前から、帰朝後は、言語学科の後継者を託されることを約束されていたほどの逸材であったといわれている。上田の信任が厚かった藤岡は、1897（明治30）年に、学術論文「日本語の性質及其發達」を提出して、同大学を卒業する。その後すぐに、同大学院の入学を許可されている。

在学中には、特待生に選出されていたが、ちなみに、この頃、特待生になったのは、二学年後輩になる後の京都帝国大学教授新村出ともう一年後輩になる東京外国語大学教授八杉貞利だけしかいない。藤岡と同年で、上田と東京帝国大学の国語研究室において、後に「国語学」の理念の構築に専念する保科孝一（1872-1955）の回想録では、藤岡勝二は、上田門下のナンバーワンであったと記されている⁴⁾。さらに、1897（明治30）年9月より、真言東京中学教授を嘱託として勤務し、1898（明治31）年2月には、保科孝一、国語学者岡田正美（1871-1923）とともに図書館嘱託、同年4月には、「国語」に関する事項取調の嘱託を務めている。また、1899（明治32）年5月に、高等師範学校国語科講師を嘱託として勤務している。当時の国語国字問題は、単に国語や言語学の専門家だけに特化した問題にとどまらず、国家的規模の問題として取り上げられる重要な課題であった。師の上田が、文部省専門学務局長として、実質的にリードをしていた国語調査会が官制の国語調査委員会になる直前のことであり、藤岡もドイツ留学から帰朝した後すぐに、この国語調査委員会の正式な委員として就任している。1900（明治33）年には、小学校令が公布され、「国語」という教科目が誕生するのであるが、この頃、藤岡は、1900（明治33）年3月に、羅馬字書方取調委員に任命されている。以下に、国語調査委員会の調査方針を掲げるが、この方針がでる前に、藤岡、保科、岡田が「国語」に関する事項取調の嘱託を務めていたことは、特筆すべき点であり、この三者は、いずれも、『言語學雑誌』にも論文を寄稿している。

国語調査委員会の調査方針

○国語調査委員会決議事項 国語調査委員会ハ本年四月ヨリ同六月ニ涉リテ九回委員会ヲ開キ其調査方針ニ就キテ左ノ如ク決議セリ

1. 文字ハ音韻文字（フォノグラム）ヲ採用スルコト、シ假名羅馬字等ノ得失ヲ調査スルコト
2. 文章ハ言文一致體ヲ採用スルコト、シ是ニ關スル調査ヲ爲スコト
3. 國語の音韻組織ヲ調査スルコト
4. 方言ヲ調査シテ標準語ヲ選定スルコト

本会ハ以上四件ヲ以テ向後調査スベキ主要ナル事業トス然レトモ普通教育ニ於ケル目下ノ急ニ応センカタメニ左ノ事項ニ就キテ別ニ調査スル所アラントス。

- 一 漢字節減ニ就キテ
- 二 現行普通文體ノ整理ニ就キテ
- 三 書簡文其他日常慣用スル特殊ノ文體ニ就キテ
- 四 國語假名遣ニ就キテ
- 五 字音假名遣ニ就キテ

六 外国語ノ寫シ方ニ就キテ

上述した調査方針は、近代の「言語学」という学問の理念を創りだそうとしていた研究者の理念と共通項を有している点には着目しなければならない。近代「言語学」は、近代「国語」、そして学問の理念としての「国語学」と決して無縁ではなかったのである。既述したように、この点については、後の言語学界をリードする藤岡勝二が、1898（明治31）年4月に、保科孝一、岡田正美とともに「国語」に関する事項取調の囑託、つまり、今後の「国語」という教科目の方針を、時の政府に託されていたことから窺知できる。藤岡の師である上田は、当時、国語調査会を経て、官制の国語調査委員会においても、主事の立場から、近代の「国語学」の確立に尽力していたのである。藤岡のこの頃の経歴をみれば気づくが、国語に関する重要な事項に深く携わっているのである。

近代「国語」の成立と、近代「言語学」の成立は、常に不可分の関係にあり、藤岡を中心とする数多くの当時の言語学徒が、近代の「国語」の樹立にも深く関わっていたことは括目すべき重要な事項とみなすことができるであろう。

2.2 『言語學雑誌』について

本節では、近代の「言語学」の成立事情を辿る上で、頗る重要な資料となる『言語學雑誌』について考察したい。ここで、『言語學雑誌』（1900-1902）の巻数とその体裁について、掲げることにはしたい。創刊号は、1900（明治33）年2月に刊行され、1902（明治35）年9月に第3巻第3号にて、その役割を終えている。しかしながら、最終号では、本号で終了することを窺わせる記事が全く掲載されていないため、以降も、本雑誌が継続する可能性は十分にあったことを想起させる。藤岡勝二のドイツ留学が長引いたためか、藤岡が帰朝した後、東京帝国大学文科大学に務めていた新村が、新設の京都帝国大学文科大学に異動したことが要因になったのかもしれない。

表1 『言語學雑誌』の全巻号数

	巻	号数
	第1巻	第1号～10号
	第2巻	第1号～5号
	第3巻	第1号～3号
計	3巻	18号

本雑誌の特筆すべき点は、現在の学会の機関誌の多くが、通常、年2、3回のペースで刊行されているにも関わらず、『言語學雑誌』の第一巻は、ほぼ毎月1冊の雑誌が刊行されていたことである。これは、八杉の『新縣居雜記』の記録でも窺えるが、創刊までに、ある程度の論

文が用意されており、今日の査読形式の論文という形態をとらずに、上田萬年が認めた人物に対して論文の投稿を依頼していたと考えられる⁵⁾。藤岡は、雑誌の刊行の途中で、ドイツ留学に赴くことになるが、その後も、編集人が新村や八杉に代わることはなく、最後まで責任編集人を務めている。藤岡の「言語学」という新しき学問に対する真摯な思いが強く伝わってくる雑誌の内容であり、それに相応しい当時の各分野の碩学たちが寄稿した貴重な資料が『言語学雑誌』なのである。当初の言語学会の精神的支柱であった上田萬年から、まさに言語学界の中心的存在が藤岡勝二へと変わろうとしていた途上であり、この意味では、本雑誌の創刊号は、近代の「言語学」、否、現在まで連綿として継承されてきた「言語学」という学問のメルクマールといえよう。

次に、『言語学雑誌』の主な体裁とその内容について考察したい。ここでは、第1巻第5号（明治33年6月20日発行）を例にとってみる。なお、括弧は、概ね現代の学会に該当する用語を記述した。まず、論説（学術論文）4本、雑録（研究ノート）2本、史傳（歴代の国語学者や言語学者の紹介）1本、雑報（学界に関わる研究会等の動向）12項目、紹介並に批評（言語学関連書の紹介及び書評）7項目、質疑応答1件（裏表紙に詳細に記述されており、国語学に関する内容に関わる読者からの質問とその解答）となっている。勿論、必ずしも、正確には合致しない個所もみられるが、現代言語学の雑誌の体裁の原形となったと考えられる。

また、『言語学雑誌』が当時の貴重な資料である所以は、「雑報」の欄に、次のような記述があることから窺える⁶⁾。

○言語学会大會

會するもの、會員外の有志者をあはせて三十七名、委員藤岡勝二氏起って本學會の報告及び開會の旨意を述べたのち、小川尚義氏の講演に移つた。

拙著（2013）において、この個所に注目したのは、言語学会大会において、三十七名の錚々たるメンバーを前にして、最初に、この会の趣旨を述べたのが、師の上田萬年や当時の人文学の泰斗井上哲次郎（1856-1944）、加藤弘之（1836-1916）ではなく、20代の若き言語学徒藤岡勝二であったということである。このような事実からも、藤岡の言語学会での中心的役割とその立場を窺うことができる。また、この「言語学」という用語であるが、数多くのヨーロッパの言語を漢語に翻訳した西周（1829-1897）ではなく、国語調査委員会委員長として、人文学の分野をリードした東京大学初代総理加藤弘之が、訳したことに注目しなければならない。現代言語学は、人文学の一分野とみなされがちであるが、当時は、人文系の学問を代表する分野に進展することが期待された研究だったのである。

また、「雑報」欄には、八杉貞利が研究を進めていた契沖に関する論文「契沖阿闍梨の二百

年忌」がみられる。本欄は、多くのメンバーが無記名で寄稿しているはずであるが、八杉がこの欄を書いていたことは、この「雑報」欄の記述からも窺える。さらに、「質疑応答」の内容も興味深い。拙著（2013）でも取り上げたが、次のような例が掲げられている⁷⁾。

質疑応答

「ウラル・アルタイ」語学の一斑を知るにはいかなる著書ありや。承りたし。

かなり専門的な内容の質問であり、読者も言語学の専門家であることも想起できる。ただし、雑誌の巻末には、次のような全国の取次書店も存在していたことが明記されている。この点から判断して、文体は口語体を採用し、一般読者も念頭に入れた雑誌を目指してことが十分に考えられる。ほぼ同時期に、東京帝国大学の関係者が刊行した『帝國文学』の部数が、およそほぼ三千冊から四千冊とみなされていることから考え、『言語学雑誌』も、同数以上の雑誌を刊行する予定であったことが想起できる⁸⁾。

以下に、当時の取次書店を明示すると次のようになる。

『言語学雑誌』取次書店一覧

神田区表神保町	東京堂	京橋区鎗屋町	合資會社
京橋区鎗屋町	北隆館	神田区錦町壹丁目	武蔵屋
本郷区元富士町	盛春堂	京都上京区新町通	便利堂
大坂備後町	岡島支店	名古屋本町	川瀬代助

上述したように、取次書店は、東京の書店が中心となっているが、京都や大阪、名古屋にも販売書店がみられる。例えば、京都上京区新町通の便利堂という雑誌販売店は、現在も残っている老舗である。しかしながら、質疑応答の専門的内容から判断して、やはり、読者は、言語学徒か言語に関わる仕事に従事する教員等がほとんどであったのではないかとみなすことができる。「ウラル・アルタイ」語学の一斑といった内容は、今日ほど一般言語学の本が販売されていない現状に鑑みると、ウラル語族、アルタイ諸語に関する知識がないと提出できない内容の質問事項だったはずである。

次は、『言語学雑誌』の第1巻第6号（明治33年7月20日発行）の「雑報」欄の文を掲げてみたい。ここで、特に注視したい点は、近代の「言語学」が成立する中、他の学問分野、すなわち、英語英文学、ドイツ語学・ドイツ文学の領域に属する学問の状況である。当時は、まだお雇い外国人の講義の数が多く、いち早くドイツ、フランス留学を果たした上田万年と違い、日本語で学問として、語学研究の講義ができる日本人がほとんどいなかったのである。こうした

事態を憂慮して、政府が、イギリスやドイツに優秀な日本人を派遣しようとしていたのである。このような状況下において、加藤弘之が、上田をドイツ、フランスに留学させ、最新の比較言語学、当時は青年文法学派が台頭していた時代の学問を学ばせた意義はきわめて大きいといえる。また、この折、上田は、著名な青年文法学派や東洋の言語にも精通していたゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツの講義をうけていたことも特筆しておくべきことであろう。

以下は、『雑報』の欄の記事である。ここでは、当時の英語学やドイツ語の研究状況に関する箇所を見出すことができる⁹⁾。

雑報

○海外留學生

今回語学研究のために多くの留學生が任命された。即獨逸語の側では、藤代禎輔氏、山口小太郎氏、英語の側では、夏目金之助氏、神田乃武氏である。

既述したように、上田萬年はこの頃、すでに留学経験を終え、国語調査委員会の主査をはじめ数々の政府の要職に就く立場となり、公の立場をこなしながら、国語の行く末を考え研究を進めていたのである。

一方、英語学、英文学の分野では、夏目金之助、神田乃武の二名が選出されている。ドイツ語学では、藤代禎輔氏、山口小太郎氏の兩名を留学に派遣することが決定し、この件については、「海外留學生」という題で、「雑報」欄に掲載されている。

ここで、注目すべきは、言語学の研究は、すでに上田が派遣され、その学問の方向性が模索されていたにも関わらず、英語英文学、ドイツ文学、ドイツ語学のような、今日では、どの大学にも設置されている分野の教科目は、未だお雇い外国人に頼っていたということである。そして、この分野で選抜された4名の人物は、すでに留学経験があり、東京帝国大学教授を歴任した神田乃武(1857-1923)を除けば、国家の重責を託されていた若き研究者であった。ただし、彼らに期待されていたのは、語学研究というよりあくまで語学教授法であったと考えられる。なお、ここで登場する夏目金之助(1867-1916)とは、後の文豪夏目漱石のことであるが、当時は、熊本第五高等学校の教師という立場であった。明治33(1900)年5月に英国留学の命を受けている。この翌年、1901(明治34)年に、藤岡勝二も、ドイツ、フランス留学を命じられていた。藤岡は、まだ20代の若さで、帰国後すぐに、上田から、東京帝国大学文科大学言語学科を継承して、助教授、教授と順調に昇格を果している。当時の言語学科の教員は、藤岡一人だけであり、爾来、30年近くの長きにわたり、東大言語学科、ひいては、当時の言語学界全体をリードしていくのである。

ちなみに、上述した神田乃武の四男の言語学者神田盾夫(1897-1986)は、藤岡勝二の直弟

子となり、藤岡逝去の後すぐに刊行された『藤岡博士功績記念言語學論文集』にも論文を寄稿している。この事実をもってしても、藤岡がいかに長く、東京帝国大学文科大学言語学科で後進の指導に従事していたか、窺うことができるのである。

次に、どのような言語学者、国語学者が、『言語學雑誌』に論文を寄稿していたのか、その一部を掲げておくことにしたい。また、その研究テーマは、どの分野の範疇に含まれるものであったのか、この点についても、みておきたい。

以下に、第一巻を中心とした、主要な『言語學雑誌』の分野別リストを掲げておく。

表2 『言語學雑誌』の主要な分野別リスト（著者・研究分野・巻号数・題目及びジャンル）

著者・研究分野	巻（号数）	題目及びジャンル
比較言語学		
八杉貞利	第1巻（1.4.10）	「フランツ、ポップ」の生涯及學説（史傳）
新村出	第1巻（2.3.9）	ヤコブ、グリム（史傳）
音声学		
藤岡勝二	第1巻（2.3.8）	發音をたゞすこと・發音を正すこと（論説）
上田萬年	第1巻（10）	実験的音声学に就きて（雜録）
言語学史		
保科孝一	第1巻（1）	人文史と言語學（論説）
各諸言語に関する研究		
白鳥庫吉	第1巻（2-5）	漢史に見えた朝鮮語（論説）
小川尚義	第1巻（4.5.6.10）	厦門語族に就て・ファボラング語に就て（論説）
神保小虎	第1巻（6）	アイヌの日本語（論説）
八杉貞利	第1巻（2.6）	エドキンス氏の支那語学・アイヌ語斷片（雜録）
国語学		
芳賀矢一	第1巻（1）	狂言記に見えたる諺（論説）
岡田正美	第1巻（5.6）	待遇法（論説）
近世の国学者の研究		
上田萬年	第1巻（7）	手爾波研究における富士谷本居両家の關係に就きて（論説）
高木敏雄	第1巻（5）	説話學者としての瀧澤馬琴（雜録）
南條文雄	第1巻（2.4.5）	東條義門傳及參考資料（他）（史傳）
吉丸一昌	第1巻（6.7）	鶴峰戊申・保田光則傳資料（史傳）
国語国字問題		
市村瓊次郎	第1巻（6）	文字と言語との關係（論説）
藤岡勝二	第1巻（1.9）	語學界私見・ゲルストベルガー氏日本新國字（雜録）
方言		

著者・研究分野	巻（号数）	題目及びジャンル
保科孝一	第1巻（2.3.4.7.10）	八丈島方言（雑録）
仏教学		
高楠順次郎	第1巻（5）	佛骨に関する史傳（雑録）
言文一致		
藤岡勝二	第2巻（4）	言文一致論（論説）
藤岡勝二	第2巻（5）	言文一致（論説）

ここで注目すべき事項は、『言語学雑誌』と称しながら、従来の国学の流れを踏襲した国語国文学関係の研究と同時に、上田が留学中に学んだ比較言語学に関わる最新の言語学の理論が混在しながら、一つの学術雑誌を刊行していることである。本雑誌を詳らかに考察すると分かるが、比較言語学の導入はみられるものの、まだこの段階では、「博言学」から脱した「言語学」の内実は明らかになっていない。

また、藤岡勝二は、ドイツ留学から帰朝した後、自らの「国語学」の指針となる『國語研究法』を刊行する。それは、上田や保科が目指した国家政策を包摂する「国語学」とは全く異なる理論であった。現代の言語学の理論的観点からみると、明らかに「言語学研究法」と名付けたほうが相応しい内容であった。藤岡は、本書を出版する段階では、未だ明確に形づけられていない「国語学」という学問に、最新の言語学の理論を導入しようとしていたことが窺知できるのである。「言語学」という新しき学問の名称はできていたが、その内実は、未だ各研究者で、異なっていたのである。『言語学雑誌』は、当時の言語学、国語学の成立事情を知る上で、第一級の貴重な資料でありながら、研究は未だ十分ではなく、さらなる考察が今後にも必要になるであろう。

2.3 『言語学雑誌』にみられる藤岡勝二の言説について

本節では、『言語学雑誌』にみられる藤岡勝二の言説について考察してみたい。

『言語学雑誌』の目指すところは、あくまで口語体を用いた文章であり、言文一致を具現化した学術論文を刊行することにあった。これは、国語調査委員会の調査方針である第2項目の「文章ハ言文一致體ヲ採用スルコト、シ」という考えと一致している。本雑誌の責任編集人であり、自らも数多の論文を寄稿した藤岡は、「棒引き仮名遣い」を学術論文に導入し、百年以上前とは思えないような、実に分かりやすい明瞭な文体で音声学に関する内容を寄稿している。この頃、近代の「国語」の成立に関わった中心人物として、筆者は、藤岡、保科孝一、岡田正美を挙げているが、同時に、近代の「言語学」を創りあげた主要な人物として、藤岡、新村出、八杉貞利を挙げることができると考えている。近代の「言語学」が成立する上で、藤岡勝二の功績は看過できないのと同様に、近代の「国語」が成立において、特に尽力した人物として、

保科孝一の功績を挙げておかなければならないであろう。保科は、後に、東京帝国大学文科大学国語研究室において、上田とともに、「国語」という理念を構築しようとした。近代の「言語学」は、「国語学」と互いに連携しながら、その学問領域を形づけていくのであるが、両分野が成立する渦中にいたのが藤岡勝二なのである。藤岡の言語学という学問の理念には、常に西洋からの言語学の影響があったと考えられる。この点において、契沖に関する優れた論考を寄稿した八杉、音韻論、語源、キリシタン文書等を研究対象の射程とした新村とは、藤岡の考えはかなり異なっている。彼は、従来の国学の潮流を断ち切り、西洋の言語学の理論を分かりやすい言葉で、近代の「国語学」という学問に注入しようと考えていたわけである。

以下は、藤岡が、『言語学雑誌』（第1巻第2号）の「論説」に寄稿した「發音をたゞすこと」から抜粋した言説である。本文でも窺えるように、藤岡は、これまでの漢文調の文体から脱した口語調のきわめて読みやすい論文を書いている。『言語学雑誌』の「論説」は、現代言語学の機関誌では、「学術論文」に該当する箇所であるが、旧仮名遣いと文語調の文体を除けば、専門用語を用いるわけでもなく、明瞭で分かりやすい学術論文を寄稿している。本文は、藤岡が、文献中心主義であった西洋の比較言語学の内容ではなく、音声中心主義のヘンリー・スウィート（1845-1912）の影響を受けたため、以下のような音声言語中心主義の理念を具現化した内容になっていると考えられる。

言葉は考を外へ顕す道具であるといふことは云ふまでもない明らかなことであるが、言葉が其道具と定まつて居る以上は道具間違いのない様、あぶないつかひ様をせぬ様、巧みにつかふ様にせねばならぬといふことが起つてくる。

上記の藤岡の音声中心主義の言語思想は、彼の国語国字問題におけるローマ字化運動の理論と実践、さらに世界 에스ぺラント学会に参加したという事実から窺える。つまり、「言葉の本質は音声である」という考えを貫いており、この言語理論は、「国語学」では、言文一致の考え方と深く結びついている。藤岡が、『言語学雑誌』（第2巻第5号）の「論説」に寄稿した「言文一致論」では、地域方言の重要性も論じているが、このような思想の淵源は、すべて音声重視の理論からでているものと考えられよう。その典型的な例が、藤岡が次のように学術論文で用いた「棒引き仮名遣い」である。以下の文は、『言語学雑誌』（第1巻第9号）の「雑録」欄に掲出された「ゲルストベルガー氏日本新國字」の一部である。なお、下線部は、筆者が施したことを断っておく。

氏は日本在來の平假字を分解してこれを單音組織にしよ二といふのが最初の思ひ付らしい。

最後に、『言語学雑誌』ではないが、近代「言語学」を考える上で、きわめて重要な著書『國語研究法』について述べておきたい。1907（明治40）年に刊行された著書であるが、藤岡が理想とした「国語学」とは、現代の言語学の理論を導入することであったことを如実に窺うことができる。以下の彼の言説をみれば分かるが、本書には、国学の潮流を示す箇所は微塵もみられない。最新の言語学の理論やアウグスト・シュライヒャー（1821-1868）、ガーベレンツ等の言語学者の言辭を引用しながら、自らの持論を展開しているのである¹⁰⁾。

此三つは丁度今より三十年前に獨逸の言語學者シライヘル（Schleicher）が凡ての言語の分類を三つにした。その一つへに配當することが出来る。

- (一) 單意語（又孤立語、孤獨語。isolating language）
- (二) 添着語（又粘着語、添着語とも人は云ふ。agglutinating language）
- (三) 曲尾語（又屈折語、屈曲語。inflectional language）

文章語はかやうにして、其變遷をすること比較的遅いものであるけれども、口語はなか、速やかに變遷する。ガベレンツ（Gabelentz）は吾等の今日の語は遂に昨日の語の通りでないとも極端に云ったが、さういっても差間違はない。

上記の文をみれば分かるが、現代言語学用語の「孤立語」、「膠着語」、「屈折語」が、「單意語」、「添着語」、「曲尾語」になっている。言語学の専門用語の変遷と定着に関しては、言語学史の観点からも考察すべき重要な課題であるが、注目すべき点は、本来なら言語学で使用する専門用語を「国語」研究に関する用語として掲げていることである。藤岡は、比較言語学の受容、類型論による日本語系統論の解明をすると同時に、近代言語学の祖と称されるフェルディナン・ド・ソシュール（1857-1913）、さらに彼の思想に影響を与えたウィリアム・ドゥワイト・ホイットニー（1827-1894）の言語思想にも精通しており、ホイットニーの翻訳も手掛けている。上述したように、藤岡は、近代の「言語学」の黎明期に、西洋の言語学者の様々な思想を学び、その理論を、国語学研究に注入しようと試みたのであった。

3. 『新縣居雜記』からみる藤岡勝二の果たした役割

3.1 『新縣居雜記』とは

『新縣居雜記』とは、八杉貞利の高弟の一人である東京外国語大学教授和久利誓一（1912-2001）が、八杉の残された日記を整理して、1970（昭和45）年に、刊行した著作である。八杉

は、若い頃から、毎日の出来事を正確に記していた。当時はまだ、正式な議事録が存在しなかったため、この日記は、言語学会が成立に至るまでの経緯を克明に記述した頗る貴重な資料といえよう。また、日記というきわめて私的な事項であるがゆえに、当時の正確な事実を把握できる。後に、八杉は、ロシア語学の泰斗となるが、この頃は、近代の「言語学」の成立に大変な尽力をしていることを窺うことができる。先行研究は、佐藤（2008）が、和久利（1970）を随所に引用しながら、八杉に関して考察した論文があるが、言語学、国語学の功績者としての八杉の本格的な研究は、今後も必要になるであろう。本稿は、藤岡勝二が「言語学」という学問が樹立する経緯の際に果たした役割の解明が主眼であるため、八杉の言語思想に関する考察は、稿を改めて論じることにはしない。本書に記述されている時代とその体裁であるが、明治31年度（天部、地部、玄部、黄部）、明治32年3月～4月（天部）、32年度（黄部）となっており、まさに、近代の「国語学」と「言語学」が誕生しようとする時期であった。

以下に、その一端を掲げることにする。

1898年11月24日 上田先生ニ面会 先生が専門学務局長ニ榮転之確報ヲキクハ先生ノタメニ之ヲ喜ビ一ハ学問ノタメニ之ヲ悲ム

1898年11月30日 夕刻新村出氏来訪 相伴テ上田先生ヲ訪フ「ガベレンツ」ヲヨム時間ヲ高楠ガモットイフ事ニヨリ大ニ論ゼンガタメ也

上述した文より、当時、東京帝国大学文科大学博言学科の学生であった八杉が、師上田萬年が文部省専門学務局長に就任したことを喜ぶと同時に、言語学の必読書であったゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツの著書を上田とともに輪読できないことに変落胆をしていることが窺える。また、次の文では、新村出が八杉を訪れることが記されている。新村は、一高時代に、上田萬年が留学から帰朝したとき「言語学者としての新井白石」という講演を聞き、いたく感銘をうけたことがあった。そのような事情もあり、この両者が、上田に対して大変な畏敬の念を抱いていることが窺える。すでに、サンスクリット学の泰斗であった高楠順次郎の代講であっても、当時の二人の言語学徒を納得させることができなかったのである。

3.2 『新縣居雑記』にみられる藤岡勝二の記録

藤岡勝二の初期の論文を考察すると気づくが、言語学会の黎明期において、藤岡は、音声重視の研究を主眼としていた。現代言語学における「音声学」という用語も、この頃は、「声音学」という名称が一般的に用いられており、八杉も「声音学」という用語を使用している。ただし、藤岡勝二だけは、この分野を独立した言語学における主要な学問分野にする意図があったのか、「音声学」という独自の用語を使用している。なお、この時期に、藤岡が影響をうけ

た言語学者として、ヘルマン・パウエル（1846-1921）と音声学者エドゥアルト・ジーフェルス（1850-1932）を挙げることができるが、この二人の著書は、以下の八杉の「新縣居雜記」にみられるように、当時の言語学徒にとって通読すべき必読書であったようである¹¹⁾。

1899年2月28日 書「パウエル」語史研究法、「ジーベルス」声音学

では、実際に、藤岡が、言語学会の創立に関して、どのような役割を果たしていたのかみていくことにしたい。八杉の『新縣居雜記』には、次のような瞳目すべき事項が記されている。

以下には、藤岡の名が掲出された文だけ挙げることにする。

1898年2月11日 藤岡勝二宅ニテ言語学会創立相談会アルベキ報ヲウ

1898年3月16日（水）二時半校ヲ辞シ 森川町藤岡文学士ヲ訪ヒ会ノ件ニツキ意見ヲキク

1898年3月21日 言語学会発起人会ナリ 上田、藤岡、新村三氏来ル

金沢、猪狩両氏差支アリ来ラズ 種々商議談話ス 五時ヲキ、テ散会六時帰宅

1898年4月30日 上田先生ニ面会 一時半帰宅 藤岡、齊藤両氏へ用状を出す

1899年4月18日 終校後新村出氏ト共ニ本郷五丁目藤岡勝二氏ヲ訪問シ言語学会雑誌発刊ノ相談ヲ行ウ

1899年4月20日 来 藤岡勝二氏

上記の記録から分かるように、1898（明治31）年2月に、言語学会創立相談会が、藤岡宅に行われ、翌月、上田萬年、藤岡勝二、新村出の三名が議論を交わしている。1899（明治32）年4月18日に、八杉は、新村とともに藤岡勝二に言語学会の機関誌『言語學雑誌』の方針について相談をしている。藤岡もこの頃ドイツ留学を控えていたが、『言語學雑誌』の編集人として最期まで名を連ねていたことから、留学前から、雑誌の方針を概ね決定していたと考えられよう。次に、上田との関係であるが、八杉は、新村と言語学会の方針を諮り、藤岡が中心的役割を果たしながら、最終的に上田の諾否を問うために奔走していたことをみてとることができる。『新縣居雜記』は、言語学会とその機関誌『言語學雑誌』が成立する経緯を把握できる頗る貴重な資料といえるのである。

4. おわりに

当時の国語学、言語学関連の概説書では、「言語学会」の設立事情については、次のような内容で記されている。すなわち、1898（明治31）年に、上田萬年が自らの弟子を中心に結成し

て、1900（明治33）年に、機関誌『言語學雑誌』を創刊したということであり、この事実自体は、決して誤謬ではなく、何ら異論を唱えるつもりはない。しかしながら、上記の説明だけで、近代「言語学」の象徴といえる言語学会、その機関誌『言語學雑誌』の成立事情の全貌が明らかになっているとはいえない。

本稿では、こうした現状に鑑み、現代の言語学界では、すでに忘れられた存在でありながら、この時代を語る上で頗る重要な人物である言語学者藤岡勝二に焦点をあて、彼の言語思想と同時代の人物、当時の社会的背景を視野にいれながら、近代「言語学」がいかに成立したのか考察することにした。近代「言語学」を理解する上で、重要な事項として挙げなければならないのは、「博言学」から脱して、新しき「言語学」という学問が誕生した頃、言語学会ならびにその機関誌『言語學雑誌』が刊行されたことである。そして、本稿の考察を通して、言語学会と機関誌『言語學雑誌』の経緯を概ね明らかにすることができた。この理念を構築したのは、確かに上田萬年であり、その後「国語学」という学問の確立に専念していくのであるが、『言語學雑誌』の刊行に際して、実質上、主軸としての役割を果たしたのが、諸資料を検討した結果、上田の言語学の後継者となる藤岡勝二であったことである。また、「言語学」の創立に、尽力した人物として、後の京都帝国大学教授新村出、ロシア語学の泰斗東京外国語大学教授八杉貞利の三名を挙げることができる。その完成までの流れであるが、まず、藤岡を中心とした会議が催され、博言学科の学生、特に、新村と八杉が草案を作り、最終的に八杉が上田の意向を伺いにいき、諾なら、次に方針を進めていったのである。そして、随時、藤岡を中心に会議を行うということである。勿論、中心的存在は、あくまで藤岡勝二であり、当時、東京帝国大学文科大学博言学科の新村出、八杉貞利が言語学会の設立に尽力したのである。

また、同時に、拙著（2013）を刊行して判明したことであるが、近代「言語学」の成立は、近代「国語」の成立と決して無縁であったとはいえないことである。近代「言語学」の創立に寄与した代表的人物が、藤岡勝二、新村出、八杉貞利とすると、近代「国語」の成立に最も尽力した人物として、藤岡勝二、彼を軸にして、岡田正美、保科孝一の三名を挙げることができるであろう。この三名は、いずれも、1900（明治33）年に創刊された『言語學雑誌』に、自らの論文を寄稿している。

なお、国語調査委員会が設立する前に、国語調査会が創始されているが、このメンバーには、人文学の泰斗が名を連ねている。この委員会が成立する以前、1898（明治31）年4月に、若き言語学徒であった藤岡勝二、保科孝一、そして国語学者岡田正美が加わり、「国語」に関する事項取調の囑託を託されていることは注目しなければならない事実といえよう。また、上述したように、後に、この三名は、『言語學雑誌』の「論説」欄に、論文を寄稿している。

ただし、藤岡勝二は、明治40（1907）年に刊行した『國語研究法』において、言語学の理論を国語学に導入しようと試みている。漢字廃止、表音式文字に賛同していた点や新しき「国語

学」と「言語学」の理念を構築しようとした点においては、藤岡は、上記の研究者と志を同じくしていたが、その理念に関しては些か異なる言語思想を有していたとみられる。いずれにせよ、筆者は、本稿において、近代「言語学」の成立事情にとって、最も重要な人物は、上田から、東京帝国大学文科大学言語学科を継承する藤岡勝二を位置づけることができると結論づけることにした。紙幅の関係上、改めて論じる必要性のある課題も有しており、今後も藤岡の言語思想をさらに綿密に考察することが、空白の近代言語学史の解明に大いに寄与するものとみなすことができるのである。

注

- 1) 拙著(2013)13-29頁を参照。
- 2) 現代言語学では、ウラル語族とアルタイ諸語は、明確に区別されている。
- 3) 例えば、モンゴル文語には、tとd、kとgの区別すらない。
- 4) 保科(1952)を参照。
- 5) 当時の『言語学雑誌』の学術論文は全て「論説」に分類されている。
- 6) 『言語学雑誌』(1900)第1巻第4号の83頁を参照。
- 7) 同掲書110頁を参照。
- 8) 『帝國文学』の編集委員には、藤岡勝二、岡田正美、そして、八杉貞利も関わっていた。『言語学雑誌』同様、当時の「言語学」の状況を知る上で、きわめて貴重な資料といえよう。
- 9) 『言語学雑誌』(1900)第1巻第6号の697頁を参照。
- 10) 藤岡は、現代の言語学史でしばしば掲出されるアウグスト・シュライヒャーをシライヘルと呼んでいる。これ以外にも、現在では異なる別の呼び方を使っている箇所がみられ、この頃は、まだ人名表記が定着する過渡期であったと考えられる。
- 11) ここでのヘルマン・パウルの著書は、*Prinzipien der Sprachgeschichte*『言語史原理』と考えられる。

引用文献

- 柿木重宜『なぜ言葉は変わるのか——言語学と日本語学へのプロローグ——』ナカニシヤ出版、2003年。
——「なぜ「棒引仮名遣い」は消失したのか——藤岡勝二の言語思想の変遷を辿りながら——」『文学・語学』第188号、2007年、50-58頁。
——『日本語再履修』ナカニシヤ出版、2012年。
——『近代「国語」の成立における藤岡勝二の果たした役割について』ナカニシヤ出版、2013年。
言語学会『言語学雑誌』富山房、1900-1902年。
佐藤喜之「八杉貞利とロシア語学」『学苑』第816号、2008年、64-72頁。
新村出『新村出「わが学問生活の七十年ほか」』日本図書センター、1998年。

藤岡勝二『國語研究法』三省堂書店、1907年。

藤岡博士功績記念會編『藤岡博士功績記念言語學論文集』岩波書店、1935年。

文化庁『国語施策百年史』ぎょうせい、2006年。

保科孝一『ある国語学者の回想』朝日新聞社、1952年。

八杉貞利 和久利誓一編『新縣居雜記』吾妻書房、1970年。

(かきぎ・しげたか 外国語学部教授)

